

# 進化する黒は無難

て素敵に見せたいなら、外見が卓越してはならない、と。優越を見せつけるための貴族的な色として、タンデイズムの黒が艶やかに社交のシーンを彩った。

そこへもってきて、紳士階級の仲間入りをしたい中産階級の昼間のフロックコートに「きまじめな」黒が用いられ、黒の意味が錯綜する。ウイクトリア朝紳士の謹厳な着れ高さという意味合いを加えた黒は、「フランスのボードレールが「地ならしの色」と呼ぶまでに普及する。「ダンディ」と「ジェントルマン」のいいとこ取りができた色だから、にほかならない。その結果、黒は表面上の没個性（紳士的美徳）の中にも個人の卓越性（タンデイズム）を表現できる、近代市民社会にふさわしい男の色となって今に至る。

**そ**れが黒の「表の顔」とすれば、黒には常に「裏の顔」もあった。魔術や墮落や背信といった暗黒

面の危ないイメージと巧みに戯れ、大胆でセクシーな誘惑の色として働いてきた（ちなみに進化論のチャールズ・ダーウィンは、黒さは性的な進化の一例、と書く）。

21世紀に強大になった「モード帝国（この帝国においてはもう国境などない）における「トレンドの黒」には、この裏の顔が堂々と表に表れている。加えて、贅沢の薫り。

**パ**ートナーの女性が何色のドレスを着ようと、おそれを打ち消すことで女性を最大限に引き立てるといふ騎士的役割を残しつつ、出しゃばることのない紳士的美徳の中にも一人の男としての卓越を示すというタンデイズムを發揮することができ、かつ、セクシーな誘惑力を増したラグジュアリーな色。現在トレンドの黒に意味を与えるとすれば、そんなところだろうか。無難な定番色どころではない、華やかに進化した黒である。

Progressing  
BI



# 中野香織

(服飾史家)

東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。英国ケンブリッジ大学客員研究員などを経て、文筆業に。著書に『モードの方程式』『着るものがない!』(ともに新潮社)、『スーツの神話』(文春新書)など。本誌でも「その着こなしに理由あり」が好評連載中。

## な定番色どころではない。

**ト** レンドカラーは黒である。服ばかりか時計やアクセサリ、シャネルエリアに至るまで、黒がモード界を席巻する。だが、あなたはせせら笑うかもしれない。黒ならこれまで身につけてきた、今さら流行色だなんて、と。

実際、何百年間も、男たちは黒で身を包んできた。黒はトレンドなんぞではなく無難な定番と見える。しかし、例えば西洋のファッション史を概観してみると、各時代における黒の意味が一樣ではなく、著しく変化していることがわかるのだ。

死や悲しみ、つましさを示しながらおのれを抹消することを基本的役割としていた黒が、時代とともに宗教的な力の象徴となったり、地位と経済力をもつ者だけに許される特権的な色に変容したり、個人の卓越性を誇示する色に化けたり、周囲と波長を合わせた謙遜さの便利な証しになったりする。時代によって「流行の黒」の意味は変わるのである。

**意** 味はさまざまであっても、おもしろいことに、黒の流行は国力の増大と密接な関係がある。15世紀のブルゴニー公国。16世紀のスペインとヴェニス。17世紀のオランダ。19世紀のイギリス。黒づくめの男の肖像画の数は、国力が強大になる時期に多く見られる。

**今** 日の男性服の黒の源流は、19世紀イギリスにある。1820年前後、上流階級の男性の夜会服に「カラスの濡れ羽のような」黒が流行する。タンデイズムのバイブルとなった小説「ペラム あるジェントルマンの冒険」の作者エドワード・ブルワーリットンが書く。黒を着

艶感のあるスーツは  
太いストライプの織り柄が主張する

### Uomo

黒のショートカラーのシャツに黒のナローなタイで、モダンでシャープなVゾーン。スーツは、シャイニーなストライプが映えるゴージャスな黒。オールブラックなのに凛々しく華のあるコーディネートになる。スーツ¥25,800・シャツ¥53,550・タイ¥16,800・タイバー¥15,750・ベルト¥88,200・シューズ ¥85,050/ドルチェ&ガッバーナ(ドルチェ&ガッバーナ ジャパン)

### Donna

ストレッチウールとシルクサテンのコンビが絶妙なトリプルブラックドレス。ストラップチェーンがセクシーで甘美なドレスは、胸の下のリボンが優しく可憐な雰囲気を演出する。ドレス¥318,150・サンダル¥68,250/ドルチェ&ガッバーナ(ドルチェ&ガッバーナ ジャパン)

